

## 吃音者（被差別者）の性格問題 『第二の性』から

吃音者問題を、吃音者の性格問題に集約しようとする、非吃音者のみならず、吃音者自身から提出される問題があります。

一つは、吃音者は社会性がない人が多い etc の非難です。これは、吃音者の性格がおかしいから差別されるのだという論理です。「吃音者の性格」ということがいくつかのパターンでもし示し得るとしたら、それは排除・抑圧の中で作り出されることです。これは、自分たちがなぐって傷がある人を、あの人は喧嘩早い人だと非難するようなことです。

もう一つは、吃音者運動自身の方向性が吃音者自身の性格を変えるというような方向で提示されることです。古い言友会の出版物に「愛される吃音者になろう！」というスローガンがありました。「宣言」自身にも、「明るく前向き」の「性格」の吃音者に共鳴して、皆で「性格」を変えようというような内容があります。

更に、もう一つは、会内の批判が、個人的な性格問題として批判され、運動が方向性を巡っての分岐とならずに、性格の好き・嫌いで求引・排斥が起きる、だからちゃんと討議して活動していく態勢がつかれないなどの状況があります。

最近読んでいた本から、その「性格問題」を探って見ます。

初歩的な劣等感はずつとよく見られるように、自己防御の反動をひきおこし、非常に誇張された傲慢さを気どる結果になる。・・＜中略＞・・自然なスムーズな態度や自由な飛躍や勇気に欠けている。その行動は挑戦と自己の抽象的な主張の連続である。こうしたところに確信の欠如から生じる最大の欠陥があるので、主体が自己をわすれることができない。寛大な気持で目標をめざして行くことをしない。世間からもとめられる価値の証拠をつきつけようと懸命になっている。・・・＜中略＞・・・ある対象をめざしているのではなく、その対象をとおして主観的な成功をえようとしている。

なにか偉大な事をしようとする場合、今日の女性に根本的に欠けていること、それは自己を忘れるということだ。だが、自己を忘れようと思えば、まず第一に自己をここで確実に見いだしたことを確認することがぜひ必要なのだ。男の世界へやってきたばかりの新参者で、男にあまり助力してもらっていない女は、まだあまりに自己を求め探す仕事にかかりきっている。

## ナルスム

大根女優はその私生活において自己愛のあらゆる欠陥を大げさにやってみせる。見栄坊で、敏感で、おっちょこちょいな人がらをみせる。全世界を芝居の舞台のように思いこむ。

これはポーヴォワールの『第二の性』の中の文です。この文を読みながら、吃音者団体のある全国的リーダーのことを想起しました。そのリーダーは男性です。けれど、これらの文は女性に「性格」に関するコメントですが、この文の「女（性）」というところに、彼がピッタリ当てはまるのです（「男」ということは、健常者＜社会＞に準えることができます）。

よく、そのような性格を、その人「本来がもっている性格」のように言う人がいて、それを差別の合理化に用いる人が多いのですが、要するに、これは被差別者の心理状態を示しているのです。

ポーヴォワールの『第二の性』の日本語版は、「人は女に生まれえない。女になるのだ。」という有名なフレーズで始まります。

被差別者の「性格」は、抑圧され、排除されてきた歴史の中で作られます。だから、それは多くの被差別者の中に、同じように現れます。

そのことを突破していく道は、心理的分析をして、そのことを超えようとするものではありません。

“内観”をやっている、それを他者に勧める人が、その効果を疑うような言動をし、ワークショップに参加し、その企画まで担っている人が、そのワークショップの効果を疑うような言動をしている。「甘えの構造」を指摘し、その克服を説く人が、自らその「甘えの構造」の中にいる。そのような悲喜劇が繰り返されています。

冒頭に「宣言」の運動自体が、「明るく前向き」に生きる吃音者の性格に共鳴して、自分たちもそのような性格になろうという運動だ、と書きましたが、このことは、圧倒的多数の吃音者がなぜ「暗く消極的」に生きているのか、生きざるを得ないのか、ということを理解しようとしないうところから生まれているのです!!

被差別者の「性格」がもし克服することとしてあるのなら、その道は、自らの被差別をとらえ返し、反差別の運動を進め、その運動の広がりが仲間との有機的結びつきを作り得、その運動が個別被差別のワクを超える広がりをもち得た時です!!

反差別の運動も過渡的には、偏屈さをもたざるをえないでしょう!!それは、被差別者に現れる「性格問題」と同様に、差別の重さを示しているのです。

そのことを引用した文は想起させ、吃音者問題を差別の問題として根底的にとらえ返し、反差別の運動としての実践への踏み込みを、誘っているのです!!

杉本博幸（東京）

（全言連への対話シリーズ 『吃コミ』投稿 NO.3）